

瀬戸内オーシャンズXの取組み ～連載第5回～

瀬戸内
オーシャンズX瀬戸内オーシャンズX推進協議会事務局
松浦 正樹

1. はじめに

瀬戸内オーシャンズX(日本財団と瀬戸内4県(岡山県、広島県、香川県、愛媛県)による海洋ごみ対策プロジェクト)は、2025年までに瀬戸内海への新たなごみの流入を70%減らし、回収量を10%以上増やすことを目標とし、瀬戸内海の海洋ごみの全体量を減少傾向に転じて問題解決へ繋げていくことを目指しています。本誌では、集中連載として2022.No.83から瀬戸内オーシャンズXの取組みを紹介しています。

2. 4県連携企画

2020年12月の日本財団と4県との調印を基に発足した瀬戸内オーシャンズXですが、コロナ禍の影響もあり、大きなプロジェクトについては、当初は動き出しが鈍いこともありましたが、その一方で、この間に一般化が進んだweb会議システムにより、4県の担当者レベルでは、週一回、30分程度を目安に会議を重ねています。会議と言っても堅苦しい形式ばったものではなく、担当者どうしが自由に、柔軟な発想で海ごみ対策に向き合うということで、名前も「わくわく会議」という名称で開催しています。同じ県庁内でもこれほどの頻度でやり取りを重ねている部署はそうそうないと思いますが、県を跨いでこの頻度で同じ問題に向き合うことは稀有なことであり、瀬戸内オーシャンズXが始まったことによる、この4県にできた大きな財産の一つだと思います。この「わくわく会議」では、各県の海ごみ対策の情報交換などのほか、瀬戸内オーシャンズXとして4県で何をやっていきたいかなどについても話しており、今回はそんな「わくわく会議」発の取組みを紹介します。

これまで本誌で紹介した取組みは、日本財団が主導、または各県と日本財団が綿密に調整しながら実施した事業(アクセス困難エリアでの回収実証や、川ごみ調査結果)であり、今回は4県が一丸となり取り組んだ事例です。わくわく会議発の取組みは4県担当者で案を出し合いながら実施しています。

3. 4県同時開催清掃イベント

令和4年度は、自分の地域のこと、他県のこと、そして何より瀬戸内オーシャンズXとして4県が一緒に取り組んでいるということを広く周知するということも含めて、日本財団「海と日本プロジェクト」に取り組む各県の地元放送局が核となった推進主体の協力も得ながら、瀬戸内海に面する4県で、同日・同時時間帯に、街の象徴的な存在である各県の城下に集まり、各地域の海洋ごみの特色を県民に伝え一緒に清掃活動を行うイベントを開催しました。4県の会場は別々でしたが、出陣式と帰陣式ではオンライン中継で全会場をつなぎ連動しました。各地域にはそれぞれ、歴史や地理、産業、人口など特徴があり、海洋ごみ対策もそれぞれに合う取り組みを進める必要があります。たとえば岡山の会場、岡山城がある県南部は、全国でも有数の用水路が多い地域で、「用水路チーム」と「街チーム」に分かれて清掃を実施し、参加者の意識を用水路や街中のごみに向けるような仕組みにしました。また4県の中でも人口が多い広島県では、都市の散

乱ごみが課題で、約 100 名もの参加者で、福山城周辺の市街地に散乱するごみを回収し、人と生活とごみについて考えるきっかけをつくりました。愛媛と香川は、海城である今治城と高松城の周辺で清掃を実施し、参加者は、瀬戸内海と暮らしの近さを体感し、街中のごみが海に流れ出ていることを実感しました。また、どのエリアでも共通する、実はごみが多いポイントである側溝や植え込みの間などにも注意しながら、ごみ拾いを行い、当日は 4 県合計で約 300 名が参加し、約 240 袋・100 kg のごみを回収しました。自分が生活する地域の特色を知り、隣り合う地域の話聞き、お互いの違いや共通する課題を認識するとともに、同じように瀬戸内海を大事に思う仲間がたくさんいることを感じられるイベントとなりました。県を跨いでの連携イベントというほか、ご協力いただいた放送局におかれましても、系列が違う中の連携イベントであり、大変なご苦労をされたと思います。



写真1 瀬戸内オーシャンズ X お城下清掃の陣～海ごみの発生源は街中にあり！～出陣式(開会式)の様子

4. 4県合同清掃&交流会

令和5年度は、各県の地域で活動している清掃団体・プロボノ等約 50 人が一堂に会する清掃活動と交流会を開催しました。今回集まった場所は広島県江田島市で、フロートや防舷材に使われていたであろう発泡スチロールの破片が大量に散乱、砂と混じりあい堆積している海岸で清掃活動を実施しました。事前の打合せで、海岸に大量の発泡スチロール片があるといった状況や、現地の団体は熊手で清掃をしているといった情報は聞いていましたが、実際砂浜を見て状況の深刻さを実感しました。私は今の担当になって海ごみについてじっくり向き合うようになりましたが、普段は香川県内の



写真2 掘っても掘っても発泡スチロール片

どうも流れ着いてから破片になったのではなく、破片が流れ着いているよう

海岸しか見ていないので、香川県の海ごみの状況(生活ごみが多い)はすぐに想像でき、発泡スチロール片が多いと言われても、波打ち際など一部に筋のようにたまっていたり、砂の中に散らばっているくらいを想像していました。当日の砂浜の状況はそうではなく、十数センチか多いところは数十センチほど積み重なった発泡スチロール片の上に砂が被っているような状況で、上を歩くとふわふわとした感触がする、両手で掬っても掬っても下に発泡スチロールの破片が見える、といった具合でしたので、熊手で集めるというのもこの現場では効率的な手法というのがよくわかりました。今回回収したごみもゴミ袋のほとんどは発泡スチロール片でいっぱいになったものでした。以前、愛媛県の宇和島市での清掃活動に参加した時も同様でしたが、場所毎にごみの様子は違っており、地元の人は様々な苦労をしながら海ごみ問題に向き合っていると考えさせられました。



写真3 回収したごみ(ほとんどが発泡スチロール片)

また、今回のイベントでは、清掃だけでなく、交流会(グループディスカッション)も開催しました。もともと熱心に活動している方々が集まったのもあり、意見交換は盛り上がり、後継者やスタッフの人材育成、資金やリソースの課題、活動の効率化と評価、参加者への啓蒙やPRなど、様々な話題で話し合い、そもそも製品を作る時点で、ごみとなった際に拾いやすい製品設計をしてはどうかなど、目から鱗のようなアイデアなども出ていました。

今回、他エリアの状況や、そこにも同じ志を持っている仲間がいること、また、同様の苦労を抱えているなど清掃活動と交流会を通じて、みなさんのモチベーションの高まりを感じるとともに、参加者からは次はまた別のエリアでの開催を望む声や、定期開催の要望があるなど、とても有意義な会となったと考えています。各県独自での事業ではこういった県を跨いで交流の機会を設けることはなかなか難しいところがありますので、瀬戸内オーシャンズXの取組みで実現できたことはとてもよかったと思います。これを機に、今回交流したメンバー同士がつながり、連携した活動へと発展できるよう、引き続き支援していきたいと考えています。

瀬戸内海のスナメリには30以上の地方名があります

牛窓のスナメリを見守る会 代表
小野塚 昌博

1. 瀬戸内海のスナメリ

スナメリは、ペルシャ湾から日本にかけてのインド洋、西太平洋の沿岸域に分布が確認されているクジラの仲間です。日本では、仙台湾から東京湾、伊勢湾と三河湾、瀬戸内海から響灘、大村湾、有明海から橘湾の5つの海域に分布が確認されています。強沿岸性の生き物で水深50m以上の海域には生息していないことがこれまでの研究でわかっています。また、形態や遺伝子の研究から、それぞれの分布域間において、スナメリの往来はほぼないと考えられています。瀬戸内海のスナメリは、瀬戸内海で生まれ育ち、そして死んでいきます。他の海域に行ってしまうことはなく、反対に他の海域からやってくるスナメリもいません。つまり、瀬戸内海のスナメリは、その数を減らしてしまってもよそから入ってきて数が保たれるということはないということです。他の生息域についてもこれとまったく同じことが言えます。

2. 牛窓のスナメリを見守る会

私が代表を務める「牛窓のスナメリを見守る会」(以下、見守る会)は、岡山県の東部、瀬戸内海に面した瀬戸内市牛窓町でカヤックのガイドツアーを営む私と、水族館で学芸員をされているスナメリの研究者が、とある環境保護イベントで知り合ったことをきっかけに発足しました。2008年の発足当初より『スナメリは瀬戸内海の宝もの』をキャッチフレーズに牛窓町周辺の海域で、次の三つを大きなテーマとして活動しています。

- ① スナメリの存在を沿岸住民に知ってもらうための啓発活動
- ② 主に目視観察による生息状況の調査活動
- ③ 学生や研究機関の調査における現地サポート活動

3. スナメリの地方名(呼び名)を調べる

3. 1 地方名に興味を持ったきっかけ

見守る会が拠点としている牛窓では、スナメリは「ナメソ」もしくは「ドゲンソ」という地方名で呼ばれています。「スナメリ」というのは標準的な和名ですが、地元の年配の方々と話をするとスナメリでは通じないこともあります。

「それぞれの地域に固有の呼び名があるのは、その生き物が古くから人のそばにいた証し」

これは、見守る会の発足時に長崎大学水産・環境科学総合研究科教授天野雅男先生(当時は帝京科学大学准教授)からお寄せいただいた一文にあった言葉です。私は、この言葉の書かれた1行を目にした時、地方名(地域固有の呼び名)の存在は、スナメリが身近な生き物であることを人々に伝える手段として活用できるのではないかと考えました。その時すぐには、具体的な活用法が思い浮かばなかったのですが、活動が続ける中でアイデアをひねり出しブラッシュアップさせ、徐々に活用法を組み立てていきました。運良く機会を得ることができた2012年に、「瀬戸内海におけるスナメリの地方名分布図の制作と配布」と題して調査プロジェクトを実施しました。

3. 2 具体的なプロジェクトの内容について

プロジェクトは、1) 現地ヒアリング調査、2) 分布図制作、3) 分布図(ポスター)配布、の順で行いました。見守る会の学生メンバーを主軸に実行委員を構成し、調査、集計を実施。分布図(ポスター)の制作については、視覚的なわかりやすさを考慮して外部のデザイナーに依頼しました。

1) 現地ヒアリング調査

調査範囲は、瀬戸内海環境保全特別措置法に定められる海域から、紀伊水道と豊後水道の一部(事前調査でスナメリの生息が希薄とされた海域)を除いた海域に面する地域です。

効率的な調査を実施するために、事前に各地漁協などへEメールを利用したアンケートを実施。加えて、ヒアリングのシミュレーションも行い1件あたりにかける時間を算出。これらを総合してヒアリング訪問ポイントを絞り込み、最終的に132カ所を選定しました。

現地調査は、2012年9月から12月に行い、延べ11日をかけて実施しています。

調査で訪れたポイントの多くは、過疎、高齢化の進む漁村であったため、人に遭遇すること自体が難しいところなどもあり、調査員4名で歩き回ること、ようやく1件のヒアリングが成立するような場所が非常に多くありました。また、港としての施設はあるものの既にその役割を終えてしまったようなところも複数存在したため、当初の予想よりは厳しい状況でしたが、訪問ポイントの総数は131となり、そのうち、1件以上の有効なデータを収集できたポイントが118、有効なヒアリング件数(呼称について回答の得られたもの)の総数は333となりました。

2) 分布図制作

結果をまとめ、分布図(マップ)に落とし込み、ポスターを制作しました。(A3版500部・B4版400部)

制作したポスター(ルビ無し版)は、次ページに挿入します。調査の集計結果につきましても、このポスターをご参照ください。

3) 分布図(ポスター)配布

発送配布先については、調査海域沿岸の小学校を中心に選定しました。現地調査中に調査員がポスター掲示に有用と判断した施設、機関や、アンケート回答者でポスターの送付を希望した個人、団体も対象として発送しました。発送の総数は423通となりました。(現在の総配布数は489)

4. スナメリの地方名分布からみえてくること

この調査で確認できた地方名の数、32となり(その後の調査により判明したものも含めると35)、当初予想(15程度)の倍以上となりました。

調査では、お答えいただいた方の年齢や職業についてもお聞きしています。職業別の集計を見ると、地方名回答者については、圧倒的に漁業関係者が多く、このことから、地方名発生の元は、他の水産物の呼称に見られるように漁師言葉である可能性が高いと推測しています。

漁の対象としての記録のないスナメリですが、漁網を損傷させる、魚を散らすなどの理由から、漁師には嫌われ者とされることも多く、そういった意味から各地でそれぞれに呼び名が与えられていったのかもしれませんが、そして、スナメリは他の水産物のように市場に揚がることがなかったため、漁師の付けた呼び名が一般の人に浸透することがなかったのではないかと考えています。

驚いたのは、わずか数百メートルほどしか離れていない島の間で、呼び名が違っている事例があったことです。簡素な移動手段しか持たなかった遠い昔、瀬戸内海は海そのものと無数にある島々、早くて複雑な潮流などによりコミュニティが細かく分断されていて、スナメリの呼び名にも影響を与えたのかもしれませんが、高速かつ大量移動が可能な現在との「距離感」の違いが感じられるとともに、海を中心に形成されていった瀬戸内海文化の足跡が残されているような気がしています。

5. 調査結果の活用について

この調査で取得できた地方名の情報を活用することで、スナメリを通してより多くの人に瀬戸内海へ興味を持ってもらえるよう、これからも様々な活動を行っていきたくと考えています。

この調査では、瀬戸内海一円を巡り相当な数の漁村を訪れましたが、すべてをまわりきれたわけではありません。瀬戸内海に無数に存在する島嶼部の多くは残されたままです。見守る会では、現在もオンラインで投稿いただく形を中心に継続して情報を収集しています。情報をお持ちの方は、ぜひご一報ください。

瀬戸内海における スナメリの地方名分布



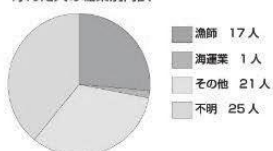
スナメリ	1	42ヶ所
ナメソ	2	28
ナメウオ	3	16
ナメ	4	13
デコンドウ	5	10
デゴン	6	7
ナミウオ	7	5
ナベ	8	5
ナメクジラ	9	5
ナメツ	10	4
ウミボウズ	11	3
スナメリクジラ	12	3
ゴン	13	3
ナベツン	14	2
ナメクジ	15	2
ナメス	16	2
ナメノイ	17	2
ゴドン	18	1
ジョゴンドウ	19	1
ゼゴン	20	1
デゴンス	21	1
デングイ	22	1
ナベウオ	23	1
ナベサン	24	1
ナベフカ	25	1
ナメスサン	26	1
ナメタ	27	1
ナメダチ	28	1
ナメツン	29	1
ナメコ	30	1
ナメノイ	31	1
ナメラ	32	1
フカ	33	1

瀬戸内海だけでも 33 の呼び名！！

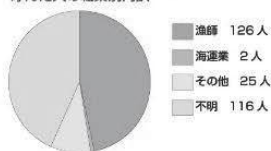
人間の生活圏のすぐそばにいらながらも食用に適さず、利用価値がほとんどなかったために、さほど注目されることなく生息してきたスナメリに、複数の地方名が存在しているということは、過去に無視できないほどの大量の個体が生息していたということの現れかもしれない。

地方名は漁師言葉が発祥？

標準和名(スナメリ)で
呼んだ人の職業別内訳



地方名(スナメリ以外)で
呼んだ人の職業別内訳

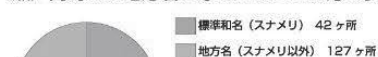


瀬戸内海におけるスナメリの地方名調査

2012年9月～12月にかけて、瀬戸内海沿岸の漁港やヨットハーバーなどを訪問し、スナメリの呼び名(地方名)についてヒアリング調査を実施しました。
延べ111日、2,814kmを走行し、131カ所で、333人の方からお話をうかがいました。地方名のみならず、スナメリの地域ごとの目撃情報などの情報もできる限り収集しました。

平成24年度公益信託 TaKaRa ハーモニストファンド助成事業
調査協力：啓明学院前島キャンパス・岡山理科大学理学部動物学清水ゼミ

瀬戸内海では地方名で呼ばれることの方が多い



年配者に
地方名を
使う人が多い。

数が減って
メジャー
ではなくなった？

標準和名(スナメリ)で
呼んだ人の平均年齢 43.0歳
地方名(スナメリ以外)で
呼んだ人の平均年齢 60.4歳

For saving the SUNAMERI.



牛窓のスナメリを見守る会